台湾に60年来の大水害

田辺三郎*

台湾中南部では1959年8月7日朝から8日にかけて豪雨があり，60年来の大水害に見舞われた．

台北発行の中央日報によれば，被害は台湾西部の苗栗から高雄までの台湾中南部一帯にわたり，中部の濁水渓の洪水は最も甚しく，全長 1900m の西螺大橋も水をかぶり，被害は死者 643，行方不明601に達する甚しいものであった．台湾気象所の説明によれば，7日9時から8日9時までの雨量は，台中および阿里山において400mm以上，台南において 190mmに達し，さらに8日9時から21時までに台中で 220mmの雨量があり，台中における36時間雨量 620mm以上は62年来の豪雨の由である．そしてこの雨は東沙群島付近に発生した熱帯低気圧が北東進して8日台湾南部を通過したためとしている．なお台中における24時間雨量の最大は1897～1940年の統計では 412mmが記録となっている．

ところで筆者が地上および高層資料を検討したところによれば，8月5日パラセルの南東方に弱い熱帯じょう乱が発生して，7日台湾南西方に接近しているのが認められる．

台湾は九州とほぼ同じ面積であるが，島の中央部やや東寄りを南北に連る中央山脈があって，最高峰は新高山（現在は玉山と改称，標高3950m）であり，標高3000m以上の峰は50を算する急峻な地形で，台風等の接近に伴って降る地形性豪雨には烈しいものがあり，今回も山間部では多量の雨があったものと推定されるが，今回の雨が特に甚しかったのには次の理由が考えられる．

すなわち8月5日頃から7日にかけては台風第6号Ellenが沖縄付近を北上しており，赤道天気図の流線解析によれば，南支邦海から台湾沖縄方面にかけては南西季節風の流入が強く，パラセル付近から沖縄南方にかけては，収束のため強いにわか雨が降り続いていた．今回の台湾の大雨は熱帯じょう乱の接近に加えて，このような台風第6号の圏内に流入する南西季節風が，強い地形性降雨をもたらしたものと見られる．なおUPIの報ずるところによれば，台湾の歴史における最大の洪水としている．

日本気象学会東北支部役員の改選について

東北支部の第2期役員の改選が行われ，その結果下記のとおり決定された．

記

支部長	理事	岡田群司
常任	理事	内海徳太郎
常任	理事	藤沢正義
	理事	山本義一
	理事	大内浩
	理事	山本正己
	理事	伊藤亀雄
	幹事	大西外史
	幹事	難波信吉

〔書評〕　宇田道隆著　**日本の海**

242頁，宝文館，1953年9月発行，280円

題名から予想されるような教科書的なものではなく，またいわゆる科学随筆でもない．著者が新聞やラジオなどに発表した海洋学の解説記事を集めたものが主成分である．著者の研究の間口が広いようにこの本の間口も広く，多くの興味ある記事が集められている．

内容は4部に分れる．特に興味をひかれるのは第3部のNHK「科学クラブ」その他のラジオ放送の原稿である．「黒潮と親潮」，「潮境」などの基礎的な話題をとらえ，博士一流の簡にして要を得た説明が加えられているのが，こういう主として聴覚にうったえるような場には特に効果をあげているように思われる．また最近話題の日本海溝について，その成因，生物，底質，底流等に関する多くの疑問をあげ，問題を列記して，強くその研究の必要性をうったえている．

本書は海洋学の専門家ではなくとも，その最近の動向やトピックスを知っておこうとする方々に，特に気象技術者の方々などにおすゝめしたい．たゞ本書の出来上り方から項目ごとにやゝ内容の統一を欠き，程度の上下があるのはやむを得ないであろう．また湍流波，暴風前駆波などはあまり一般には使われない訳語と思われる．

（気象庁統計課　宮崎正衛）

* 気象庁予報課